

2018年度

一般入試A日程  
【2/5（月）】

国語総合

（古文選択可、漢文を除く）

[60 分]

## 〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

知覚し感覚する私たちの経験において「心」と呼びうるものは何か。この問いに答えよう。私が経験する眺望には、他人と共有されるべきものとそうではないものがある。たとえば私とあなたが山道の同じ地点に立っていたとして、私には蛇が見えるのだが、あなたには縄が見えたとしよう。そのとき、少なくともどちらかがまちがっているとされねばならない。ここで蛇が見えるのか縄が見えるのかは、私とあなたとで一致しなければならぬ。だが、知覚的眺望に関して、一致しなくともそのまま認められるものもある。たとえば、花子と太郎がともに同じ場所に犬を見ていたとする。「犬が見える」ということについては二人は一致している。しかし、花子にはかわいい犬に見えるものが太郎にはかわいい犬に見えるかもしれない。そうだとすると、それはどちらかがまちがいとされねばならないわけではない。それが犬であることは一致を求められるが、その犬がかわいいのかこわいのかについては、その不一致は解消されなくともそのままに認められる。<sup>(a)</sup>これが、経験において「心」と呼びうるものにほかならない。

それに対して眺望地図は、眺望において「一致すべき」という公共的な規範を示している。単純に言ってしまうと、眺望は眺望地図に収まるべきものとしてそこからはみ出るものに分かれたれ、眺望地図をはみ出したものが「心」とされるのである。とはいえ、この構図を正確なものとするためには、まず眺望地図についての考察を補っておかねばならない。

眺望地図には、ふつうの地図のように、無視点把握された世界の空間的なあり方<sup>(注1)</sup>が描かれ、その空間的位置と方向が知覚的眺望点となり、そこからの知覚的眺望がその眺望点に描き込まれる。たとえば、浅草寺や吾妻橋<sup>(注2)</sup>やスカイツリーのレイアウトが描かれ、吾妻橋からスカイツリーの方を見たときの光景が吾妻橋の地点に描き込まれる。

眺望地図に描かれるのはそれぞれの人が知りえた範囲に限定され、また、知っている範囲の中でも自分に関心のないことについては省略される。行ったことも情報を得たこともない場所の眺望地図を描くことはできないし、自分が住んでいる近所でも、関心がなければ眺望地図には描かれない。それゆえ、すべての人が同じ眺望地図の<sup>(ア)</sup>リョウカイをもっているわけではない。私は私の眺望地図のリョウカイのもとに行動し、あなたはあなたの眺望地図のリョウカイのもとに行動する。だが、それはお互いに矛盾しあっているわけではない。もし私の眺望地図とあなたの眺望地図を比べてみて矛盾する点があったとしたら——たとえば私の眺望地図では大学の七階にある教室の窓からスカイツリーが見えることに

なっているが、あなたの眺望地図では見えないことになっているとしたら、それは A ののである。正確に描かれているかぎり、描かれる眺望地図の内容が私と他人とで互いに矛盾しあうということはない。たんにひとによってその地図のカバーしている範囲が異なり、またその詳細さにも違いがあるというだけのことである。それゆえ、そうしようと思えば、それぞれの眺望地図を統合してより包括的な眺望地図を描くことはできる。

私は先に、眺望地図をはみ出たものが「心」とされると述べた<sup>(b)</sup>。しかし、これは正確ではない。たんに私の眺望地図をはみ出ているだけならば、それはただ私が知らなかったり私には関心がないというだけであるかもしれない。ここで「心」と対比されるべきポイントは、より包括的な眺望地図へと統合することができるかどうかである。公共的な世界はより包括的な眺望地図に統合される可能性がある。それに対して、より包括的な眺望地図に統合されない眺望がある。それが経験において「心」とされる側面にほかならない。

経験において「心」とされるもののひとつは感覚的眺望である。眺望地図をより包括的にしても、そこに感覚的眺望が描き込まれることはない。だが、その点については少し慎重に考えておかねばならない。なるほど「太郎の指に棘が刺さっている」といった事実は眺望地図に描かれる。眺望地図は私の認知と行動に応じて時々刻々改訂されるから、太郎の指に棘が刺さっているのを見つけ、そのことに関心をもったならば、私はそのことをそのときの私の眺望地図に描くだろう。だが、その棘によって太郎が感じている痛みは眺望地図に描かれることはない。他人の痛みだから？ 関心がないから？ いや、そうではない。

眺望地図は眺望点と眺望の関係を記載したものである。それは誰かが特定の眺望点に立つこととは独立に成立している。吾妻橋の知覚的眺望点にはスカイツリーの知覚的眺望が描かれるが、知覚的感受性をもつ誰かがそこに立っている必要はない。もちろん誰かがそこに立てばその人はその眺望に出会うだろうが、吾妻橋の上に誰ひとり立っていないなくとも、そこからのスカイツリーの眺望は存在している。経験と独立に存在するというあり方は「実在論的」と呼ばれるが、その言葉を用いるならば、眺望地図は実在論的に世界のあり方を描いたものにほかならない。

他方、感覚的眺望は実在論的なあり方をしていない。誰かの身体に棘が刺さってはじめて、棘が刺さった痛みが生じるのであり、スカイツリーの眺望が誰かに出会われるのを待っているとは異なり、痛みが誰かに経験されるのを待っているということはない。それゆえ、感覚的眺望は——私のものであれ他人のものであれ——眺望地図には描かれない。

また、それは関心がないから描かれることがないというわけでもない。太郎の指に棘が刺さっていることに私は関心をもち、痛そうだなと思う。しかし、太郎のその痛みは眺望地図に描き込まれていることではなく、眺望地図から読みとられるべきことである。私たちは一般的なリョウカイとして、「指に棘が刺されれば痛い」ということを知っている。この知識と眺望地図のあり方から、太郎が経験しているだろう感覚的眺望

を知るのである。

<sup>(d)</sup>この事情は知覚的眺望の場合であっても変わらない。眺望地図には吾妻橋からの眺望が描き込まれている。いま花子が吾妻橋の上に立っているとしよう。私はそれを見て、いまの私の眺望地図にその事実を描く。そこで私は、そのことからいま花子にはスカイツリーが見えていると判断する。この判断は眺望地図からヨウイに読みとられることではあるが、「いま花子にはスカイツリーが見えている」ということは眺望地図に描かれていることではない。

もしかしたら、この点がまだよく呑み込めないという人もいるかもしれない。おそらく、「B」と考えられてしまうのだろう。だが、それは誤解である。知覚的眺望は個人の経験ではない。誰も見ていなくとも知覚的眺望は存在している。ここで個人の経験と呼ぶべきは、その知覚的眺望に出会っていることである。それに対して、感覚的眺望は個人の経験でしかありえない。誰も感じていない痛みなどありはしない。眺望地図は個人の経験のあり方を記載したのではなく、無視点把握および有視点把握された世界のあり方を記載したものである。それゆえ、感覚的眺望は眺望地図に描き込まれることはない。

眺望は必ずなんらかの相貌をもつ。それゆえ、眺望地図に描き込まれる眺望もまた相貌をもっている。しかし、どんな相貌でも眺望地図に描かれるというわけではない。ここに、経験において「心」と呼ばれるべき側面の核心がある。

たとえば花子と太郎が同じ場所に立ち、目の前に一匹の犬を見ているとしよう。花子は長年犬を飼っている愛犬家であり、他方太郎は子どもの頃に犬に襲われ、それ以来犬は大嫌いで恐怖心を抱くようになっていいる。そんな二人には、その一匹の犬がかなり異なったものに見えるに違いない。あるいは、同じ一個の腕時計を見るとき、私もあなたもそれを「腕時計」という意味のもとに見る。しかし、それは実は私の親の形見であり、あなたはそのことを知らない。そのとき、あなたにはそれはなんのへんてつもない腕時計に見えるだろうが、私にはそれは親の形見の、だいなものとして見えている。人によるこうした違いが「心」と呼ぶうることがらだと考えることは、直感的に見て自然だろう。この直感を、相貌論のもとでより明確なものとしよう。

複数の人で共有されている相貌を「公共的相貌」と呼び、共有されていない相貌を「個人的相貌」と呼ぶことにする。上の例で言えば、花子と太郎にとって「C」という相貌は公共的であり、花子が見るだろう「D」という相貌や太郎が見るだろう「E」という相貌は個人的である。あるいは私とあなたが見る「腕時計」という相貌は私たちにとって公共的であり、「親の形見のだいなもの」という相貌は私にとっての個人的なものとなる。同じ一匹の犬が、あるいは同じ一個の腕時計が、公共的な相貌と個人的な相貌をともに帯びている。相貌は、私と他者とで部分的に共有され、部分的に発散しているのである。

相貌の公共性は、つねに「ある共同体にとって」という限定をもっている。「共同体」という用語を、多少広い意味にとり、なんらかの行動をもとにする複数の人間の集まりを意味するものとしよう。家族も共同体であり、ある期間だけでもに仕事をするようになったメンバーも期間限定で共同体である。より大きい共同体としては、同じ言語を用いている人たちによる共同体、すなわち言語共同体がある。ある相貌が公共的であるとき、それは必ずなんらかの共同体にとって公共的となる。二人だけが共有する相貌もありうる。たとえば、姉弟が親の死という物語を共有し、「親の形見」という相貌を共有したり、親が住んでいた部屋をともに悲しみの相貌で見ることがあるだろう。あるいは、サッカーの試合において、チームAとチームBでは一つのパスがもつ相貌はまったく異なるだろうし、Aのプレイヤーたちには守るべきゴールと見えているものがBのプレイヤーたちには攻めるべきゴールに見えるもするだろうが、しかし、一つのチーム内ではそうした相貌はある程度共有されているに違いない。また、「犬」という言語を使用する言語共同体では、「犬」という概念が開く<sup>(ウ)</sup>テンケイテキナ物語が共有され、それによって犬の相貌も共有される。このように、相貌の公共性と個人性は共同体に相対化されねばならない。

公共的な相貌は眺望地図に描き込まれる。私たちはしばしば複数の人間で共同して何ごとかを行なう。そのとき、そうした共同の実践を<sup>(エ)</sup>ミチビク眺望地図はそのメンバーにおいて共通のものでなければならぬ。人と待ち合わせをする場合でも、共通の眺望地図に訴えなければ<sup>(オ)</sup>シユビよく待ち合わせをすることはできない。複数の人に共有されている眺望地図を「公共的な眺望地図」と呼ぶとすれば、公共的な眺望地図には公共的な相貌が描かれることになる。逆に、個人的な相貌は公共的な眺望地図には描き込まれない。公共的な眺望地図からはみ出た個人的な相貌は、心に属している。ここに、世界はその相貌において公共的な側面と心に属する個人的な側面に分かれたることになる。

ただし、多少ややこしい事情がある。公共的な眺望地図をはみ出た相貌が心に属する個人的な相貌であると言ったためには、F。たとえばある町内会を考えてみよう。同じ町内会に属しているからといって、町内に関して全員が同じ公共的な眺望地図をもっているわけではない。それぞれ自分の<sup>(カ)</sup>ジュウキョの近くについては他の人たちよりも詳しい。それでそれを統合して、より包括的な町内の眺望地図を作ることができ<sup>(キ)</sup>る。その公共的な眺望地図には、その町内会にとって公共的であるような相貌が描かれることになるだろう。

町内にあるパン屋から、朝のある時間帯にはパンが焼ける香りがしてくる。私はそのことを知っているが、町内会のメンバーの中には知らない人もいる。しかし、だからといって、パンが焼ける香りがしてくるという事実が私の心に属する個人的なことがらとされるわけではない。町内会のメンバーがそれぞれ知識を出し合って、より包括的な眺望地図を作ったとすれば、そのパン屋から朝のある時間帯にパンが焼ける香りが出てくるといふことも、より包括的な眺望地図には<sup>(キ)</sup>ケイサイされるだろう。

他方、パンを焼く香りが私には<sup>(ケ)</sup>少年期を過ごした別の町のパン屋を思い出させる<sup>(ケ)</sup>ナツかしさを帯びていたとしても、それは町内会の公共的な

眺望地図をどれほど包括的に統合しようと描かれることはない。そのナツかしさの相貌は私にとっての個人的な相貌にすぎない。

ある共同体においてより包括的な眺望地図に統合されえない相貌を、その共同体において「個人的でしかありえない相貌」と呼ぼう。この言い方をするならば、相貌に関して「心とは何か」という問いに、こう答えることができる。個人的でしかありえない相貌は心に属する。あるいは、いささかもたつく言い方を厭わずに言うならば、こうなる。ある共同体においてより包括的な眺望地図に統合されえない相貌は、その共同体にとって心に属する個人的な相貌である。

私は、世界の中で、さまざまな共同体に属しつつ生きている。世界に秩序をとるため、私は眺望地図を描く。また、私が属している共同体のメンバーとともに活動するため、公共的な眺望地図を描く。そのとき、世界は公共的な眺望地図に描かれる側面とそこからはみ出してしまう側面に分かれたる。公共的な眺望地図に統合されえない世界、これが「心」である。

「心」とは「意識」という言葉で示唆されるような閉ざされた内面ではない。個人的な相貌と公共的な相貌は、「内」と「外」という仕方で明確に境界づけられているわけではない。たとえば、ある宗教的共同体にとってある像が価値あるものとしての相貌をもち、その価値づけが完全にその共同体のメンバー全員に共有されているのだとすれば、それは公共的な相貌である。他方、その価値づけが共同体において共有されず、人によって異なるとすれば、それは個人的な相貌となる。そして、メンバー間でその価値づけに多少の温度差が見られるといった、その中間で(二)あるようなビミョウな場合もあるだろう。ある像が価値あるものとしての相貌をもつかどうかは、きっぱりと公共的か個人的かに二分されるようなことではなく、グラデーションをもっている。「心」とは、心の内と外がきっぱり二分されるようなものではなく、個人的な心に属するか公共的な世界に属するかは、連続的に推移するのである。

(野矢茂樹『心という難問 空間・身体・意味』による)

(注1) 無視点把握——特定の視点から見たということが示されない把握の仕方

(注2) 吾妻橋——東京スカイツリー近くの隅田川にかかる橋

問一 傍線部(ア)～(コ)の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 1 。

10

(ア) リヨウカイ

1

- ① あの人はキリヨウに乏しい人だ
- ② 会社のドウリヨウと話す
- ③ コウリヨウとした土地
- ④ 意識がメイリヨウになる
- ⑤ 作品にミリヨウされる

(イ) ヨウイ

2

- ① 何事も我慢がカンヨウだ
- ② 正社員としてサイヨウする
- ③ ヨウヨウたる未来
- ④ ヨウニンしがたい発言
- ⑤ ボンヨウな人物

(ウ) テンケイテキ

3

- ① セイケイを立てる
- ② いくつかのルイケイに分ける
- ③ 事態をケイシする
- ④ 学問タイケイを樹立する
- ⑤ ケイレキを調べる

(エ) ミチビク

4

- ① インドウを渡す
- ② 威風ドウドウたる態度
- ③ 工場の機械をカドウさせる
- ④ ドウケ者としてふるまう
- ⑤ 公私をコンドウする

(オ) シユビ

5

- ① 会をシユサイする
- ② 植物をイシユ交配させる
- ③ 法令をジユンシユする
- ④ 君の考えにはシユコウしかねる
- ⑤ シユクンを立てる

(カ) ジユウキヨ

6

- ① ケンキヨに振る舞う
- ② イツキヨ一動を見守る
- ③ インキヨ生活を送る
- ④ 身のキヨシユウに迷う
- ⑤ 部屋をセンキヨする

(キ) ケイサイ

7

- ① 荷物マンサイの車
- ② 木をバツサイする
- ③ 対立する二人のチュウサイに入る
- ④ サイム超過に陥る
- ⑤ セイサイを欠く



(ク) スゴした

8

- ① レンカで販売する
- ② カダんな挑戦
- ③ カフクはあざなえる縄のごとし
- ④ ある騒動でカチユウの人になる
- ⑤ カンカできない事態

(ケ) ナツかしさ

9

- ① 意見をカイチンする
- ② カイギの念を抱く
- ③ 人の意見をキョツカイする
- ④ ユカイな仲間
- ⑤ 建物がホウカイする

(コ) ビシヨウ

10

- ① 国境をケイビする
- ② タンビの声をあげる
- ③ 前の車をツイビする
- ④ 人情のキビに触れる
- ⑤ ショウビの急を告げる事態

問二 傍線部(a)「これ」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11。

- ① 知覚的眺望の中で、自分と他者との間で認識が異なるはずのもの。
- ② 知覚的眺望の中で、他人と共有されるべきものとそうでないものの両方。
- ③ 知覚的眺望の中で、自分と他者との間で認識が必ずしも一致しなくともよいもの。
- ④ 知覚的眺望の中で、自分と他者の、どちらの認識が適切かを問われるようなもの。
- ⑤ 知覚的眺望の中で、自分と他者との間で認識が一致しなければならぬもの。

問三 空欄 A に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 12。

- ① どちらかが省略されている
- ② どちらかがまちがっている
- ③ どちらかが見えていない
- ④ どちらかが詳しく書かれている
- ⑤ どちらかが知らない

問四 傍線部 (b) 「しかし、これは正確ではない」の理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

- ① ある人の眺望地図のなかに入らないものの中には、他者との矛盾が解消されていないためなかに入られていないものもあるから。
- ② ある人の眺望地図に収まらないものの中には、包括的な眺望地図に統合されるような本来は眺望地図に収まるべきものもあるから。
- ③ 様々な人の眺望地図を統合したものの中にも、本来であれば「心」に属するようなものがある可能性を排除できないから。
- ④ ある人の眺望地図をはみ出したものの中には、包括的な眺望地図に統合されなくとも他者と共有することが可能なものがあるから。
- ⑤ 様々な人の眺望地図を包括的に描いたものであっても、その詳細さやカバーする範囲においてまだ不十分さが見られるから。

問五 傍線部 (c) 「だが、その棘によって太郎が感じている痛みは眺望地図に描かれることはない」の理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 太郎が感じた痛みについて、すべての人が認める時に初めて眺望地図は描かれるべきだから。
- ② 感覚的眺望は、眺望地図のように他の誰かに出会われることを必要としているわけではないから。
- ③ 太郎が感じた痛みは個人の経験に属するため、知覚的眺望に位置づけられるべきものだから。
- ④ 眺望地図は、経験と独立したものと存在するという考え方に基づき描かれるべきものだから。
- ⑤ 棘によって太郎が感じた痛みを、同じように痛いと感じる人とそうでない人の両方がいるはずだから。

問六 傍線部(d)「この事情は知覚的眺望の場合であっても変わらない」とはどういうことか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 知覚的眺望においても、知覚は個人ごとに異なるため、知覚的眺望自体から読み取られるべきこととして扱われる。
- ② 知覚的眺望においても、他者の知覚や感覚であっても、それを想像したり推測したりすることが可能なものとして扱われる。
- ③ 知覚的眺望においても、個人の認識や感覚は主観的なものとして扱われ、眺望地図には入れられないものとして扱われる。
- ④ 知覚的眺望においても、知覚は個人でされるものであるが、感覚的眺望と同じように共通理解が可能なものとして扱われる。
- ⑤ 知覚的眺望においても、個人の経験に属することは眺望地図に描かれず、眺望地図から読み取られるべきこととして扱われる。

問七 空欄  に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 有視点把握された世界⇨経験された世界
- ② 無視点の世界⇨知覚可能な世界
- ③ 有視点把握された世界⇨知覚可能な世界
- ④ 無視点の世界⇨経験されない世界
- ⑤ 有視点把握された世界⇨知覚不可能な世界

問八 空欄  ・  ・  に入る最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は  は 、  
・  は  ・  は 。

- ① かわいい
- ② こわい
- ③ 襲われる
- ④ 愛犬家
- ⑤ 同じ場所
- ⑥ 犬

問九 空欄 F に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① それぞれが持つ個人的な相貌同士を比較し合わなければならない
- ② 公共的な眺望地図はより包括的なものに統合されていなければならない
- ③ 個々人が持つ個人的な相貌の真偽を確かめなければならない
- ④ 公共的な眺望地図そのものが存在するかを証明しなければならない
- ⑤ 個人的な相貌と公共的な相貌の違いを確認しなければならない

問十 傍線部 (e) 「個人的な相貌と公共的な相貌は、「内」と「外」という仕方で明確に境界づけられているわけではない」ことの理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 21。

- ① ある相貌が個人的なものか公共的のものかの判断は、人間の内面によってなされるものではなく、その時に属する共同体の構成員全員の合意によってなされるものだから。
- ② ある相貌が個人的であるか公共的であるかの判断は、判断する際に属する共同体に左右されるものであるが、その共同体の構成員は常に入れ替わりがあるから。
- ③ ある相貌が個人的であっても公共的であっても、判断する際に属する共同体すべての人にとって、判断の対象となる像そのものは変わらないものとして存在するから。
- ④ ある相貌が個人的なものであるか公共的なものであるかは、判断する際に属する共同体において、どれだけの人が対象となる像を価値あるものとするかによって異なるから。
- ⑤ ある相貌が個人的であるか公共的であるかということは、共同体がそれを「内」であるか「外」であるかを判断することに関係なく、客観的な事実として存在するから。

問十一 次の文章は、本文を読んだある人の意見文である。これに対して、本文に基づき意見を述べるならば、どのようなことが言えるか。最も適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。解答番号は 22。

確かに筆者の述べるとおり、ある共同体の中で共有されないような相貌を「心」と位置づけることは、筆者の挙げている例だけから判断すれば納得できる。しかし、「心」の中にも、その共同体全員で共有されるようなこともある。例えば、愛しい人を亡くした時の悲しみなどは、どのような共同体であつても皆同じ思いを抱くのではないだろうか。

- ① 筆者は感覚的眺望の説明で、痛いという感覚は眺望地図には描き込まれずに読み取られるべきことであると述べている。このことをふまえるならば、「悲しい」という気持ちも読み取られるべき公共的な相貌であると言え、個人的な相貌である「心」ではない。
- ② 筆者は眺望地図から外れるものを「心」と位置づけている。その上で、外れるものとして「感覚的眺望」と「知覚的眺望」を挙げている。このことから、筆者にとつて心を誘発するのは感覚や知覚のみであり、筆者にとつて「悲しい」という感情は「心」ではない。
- ③ 愛しい人を亡くした悲しみが共同体のすべての人に共有されたならば、それは公共的な相貌と言える。一方、愛しい人を亡くした状況は様々であり、その様々な状況を背景に抱く悲しみの内実は異なる。それが、個人的相貌であり「心」であると言える。
- ④ 確かに愛しい人を亡くした時の悲しみは皆が感じるものだ。しかし、それを悲しいと感じることに否定的であつたり、悲しいと感じたりすることを禁ずる共同体もあるだろう。そのような共同体の存在を否定できない限り、悲しいという気持ちは「心」とは言えない。
- ⑤ 筆者は、有視点で把握されたものを個人的な相貌、無視点で把握されたものを公共的な相貌と、それぞれ関連付けている。そのことをふまえると、愛しい人を亡くした悲しみは有視点でも無視点でも把握できるものであるから、「心」であるとも「心」でないとも言える。

〔選択問題〕 〈現代文〉か 〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕 〈現代文〉 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

次々と移りゆく常ならぬ世のありさまを「ゆく河の流れ」に喩えて語る『方丈記』。祇園精舎の鐘の響きから「諸行無常」を聴き取る『平家物語』。これらに示されるように、中世という時代の本質は「無常」である。——というところ、多くの人が納得する。「中世を代表する文学作品の『方丈記』や『平家物語』でも無常がテーマになっているのだから、当然だ」という人も少なくない。しかし、ここには二重の誤解がある。

まず、『方丈記』や『平家物語』は、本当に中世を代表する文学作品なのか。次に、これらの説く「無常」は、本当に中世という時代の本質を示しているのか。「中世が無常の時代というのは本当か」という命題を考えるには、こうした点を問い直してゆかなければならない。

<sup>1)</sup> ある文学作品をもってある時代の代表とする考え方は、どこに由来するのだろうか。上代といえは『古事記』『日本書紀』『万葉集』、中古といえは『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』、中世といえは『方丈記』『平家物語』『徒然草』……といった類いのものである。

「これらの作品は、教科書や文学史に必ず載っているし、注釈書や現代語訳も多数刊行されているではないか」と思う向きもあるが、よく考えていただきたい。これらを教科書や文学史に載せたのは誰か。注釈書や現代語訳を作ろうと判断したのは誰なのか。そして彼らは、なぜそういう判断をしたのか。

近代を迎え、「国民」に共有される古典という「新たな伝統」が要請されるようになった。そうした動向のなかで、三上参次と高津敏三郎とにより、日本で最初の文学史といわれる『日本文学史』（一八九〇年）が刊行された。また、これより数ヶ月早く、芳賀矢一と立花銚三郎とによって『国文学読本』（一八九〇年）が刊行されており、「文学史」の名は冠していないものの、時代を区分し、そこに作家や作品を並べて記述しており、こちらも実質的には文学史といえるものである。

三上らは『日本文学史』緒言で、西洋には文学書・文学史なるものがあるが日本にはそれがないため、日本文学の研究は外国文学を研究するよりも困難であると嘆息し、「名家の傑作を掲げて、之に批評を加へ、之が註釈を下し、且つ作者の小伝を付した」西洋の文学書を参照して本書をなしたとしている。作家・作品を時代順に並べる文学史の叙述形式は、こうして創られた。また、『国文学読本』では、日本文学の沿革を研究することによって国民の思想の変遷を知ることができるが、紙幅と能力に限界があるので、時代ごとに分けたうえ、各時代の特性を略述するとしている。このときに示された時代区分は「上古」「中古」「鎌倉時代」「室町時代」「江戸時代」「維新後」というものであった。位相の異なる呼称が混在しているが、『日本文学史』では「奈良朝」「平安朝」「鎌倉時代」「南北朝時代及び室町時代」「江戸時代」と、政治史的呼称に統一されている。これ以降、種々の文学史で時代区分が試みられて整理された結果、現在では「上代」「中古」「中世」「近世」「近代」という

区分が一般的となっている。とはいえ、例えばヨーロッパや中国の「中世」と日本のそれとが一致するはずもなく、あくまで日本のみに限定される呼称として、中世はおおむね鎌倉・室町時代に相当するものとして運用されている。

さて、こうして時代を区分したうえで、それぞれの時代ごとに「名家の傑作」を挙げるといって西洋方式が日本文学史でも踏襲されることになり、その選定がおこなわれた。また、この年に博文館より刊行された『日本文学全書』全二十四巻および『日本歌学全書』全十二巻は、いわゆる「文学全集」の先駆けである。こうした文学史や全集類に収録された「文学作品」は、特定少数の編者らにより重要で有名であると判断されたといえよう。それらのなかに『方丈記』も『平家物語』も含まれるが、このように草創期の文学史や全集に収録されたものが、それ以降も踏襲されてゆくケースが少なくない。後世の読者は、これらの著述に収録されているという「安堵」<sup>あんど</sup>にもたれかかり、自ら判断せずとも「時代を代表する重要な作品」として認識することができる。

付け加えるならば、「Literature」という概念が既存の日本語にあった「文学」という語と結び付き、「言語芸術」を意味する概念に変容していったのもこの時期であり、過去の多種多様な文献資料から「文学」を抽出するという作業ももたっていたはずだ。近代的「文学」概念のなかった時代に書かれた『方丈記』や『平家物語』が、この「文学」という新来の概念に相当するという、幾多の価値判断を経て判定された結果も、以降は無批判に踏襲されてゆくことになる。

ところで、中世の特徴を示すとされる「無常」という語は、中世特有のものなのだろうか。試みに、データベース『Japan Knowledge』で『新編日本古典文学大系』収録作品から「無常」という語を検索してみたところ、八十六作品にこの語が使用されていることがわかり、時代別の内訳は上代一、中古九、中世二十六、近世五十であった。この結果だけ見ると、あたかも時代が降るにつれて用例が増加しているかのようにも見えるが、新編全集に収録されている作品数が各時代とも同数というわけではないので、数値の比較はあまり意味がない。また、「無常」の語義も時代や文脈によって異なる場合があるので、この結果からいえることは、「無常」という語が時代を通して広く使用されているということとどまる。

では、なぜこの「無常」が、中世の本質であるかのような誤解が定着してしまったのか。これもおそらく、近代に創られたイメージなのではないかと思われる。

先に挙げた『日本文学史』では、「鎌倉時代の文学」の総論で承久の乱に言及しつつ、「さすがに猛き関東武士と雖、無常を感じることも深く」と述べるが、「平安朝の文学」の総論中でも、「唐風を模して、浮華を尊び、仏法を信じて、無常を感じる時代」としている。各時代にそれぞれの特徴があるという前提で叙述しているのだが、平安・鎌倉いずれも「無常」という言葉によって時代の特徴の一面が説明されている。あくまで一面にすぎぬものであるが、例えば本田義憲『日本人の無常観』（一九六八年）や西田正好『無常観の系譜——日本仏教文芸思想史 古代・中世編』（一九七〇年）も、古代（上代・中古）・中世の文学作品から「無常観」を見いだそうとしている。西田はさらに『無常観の伝承——日

本仏教文芸思想史 近世・近代編』(一九七六年)において、こうした無常観は近世・近代にも継承されていったとするが、このように「無常」は時代を問わず種々の文献や事象から見いだすことができるのである。にもかかわらず、なぜ「無常」は中世の専売特許のようになってしまったのか。

これはおそらく、無常が「仏教的無常観」等の文脈で語られていたことと関わるのではないか。六世紀に伝来した仏教は、八世紀の記紀を始発とする日本文学史に最初から関わっていることはいまでもない。しかし、日本文学研究における記紀は、その冒頭に記された神話ばかりが注目され、仏教の印象はきわめて薄い。中古文学も、やはりいちばん注目されるのは、王朝物語に見られる貴族たちのきらびやかな宮廷世界という側面であろう。例えば藤岡作太郎が『国文学全史 平安朝篇』(一九〇五年)で仏教の影響を重視し<sup>(注)</sup>縷説したように、かつては中古文学においても仏教は当然の前提であったが、時代区分を導入した文学史が次々と著されるなかで、それぞれの時代にそれぞれの特徴を積極的に見いだそうとする傾向が顕著となつていき、他時代との差別化が必要とされた。つまり、<sup>(4)</sup>時代を区分したことにより、時代の特徴なるものが過剰に意識されるようになったのである。

尾上八郎『日本文学新史』(一九一四年)の「情(感情) 中心時代」「法(仏法) 中心時代」「道(儒道) 中心時代」「主義(文芸主義) 中心時代」、あるいは津田左右吉や折口信夫が試みた作者階級による時代区分、<sup>(5)</sup>即ち「貴族文学」「武士文学」「平民文学」(津田『文学に現はれたる我が国民思想の研究』一九一六年)や「伝承者の文学」「女房の文学」「寺家の文学」「隱者の文学」「町人の文学」(折口『日本文学啓蒙』一九五〇年)などは、政治史区分を退け、文学特有の理論で時代を区分すべしという姿勢のもとに提唱されたものであるが、このなかで現在「中世」とされる時代にほぼ重なるのは、尾上の「法中心時代」、津田の「武士文学」の時代、折口の「寺家の文学」「隱者の文学」の時代である。新たな区分の試みが、結果として政治史的区分の各時代に、それぞれの個性を与えてしまった。つまり、「仏教」「武士」「隱者」が、中世を他の時代と区別する指標となったのである。これらが中世だけに限定されるものでないことはいうまでもないが、他の時代にはより相応しい要素があるので、あえてこれらを他時代のイメージに据える必要はない。アフリカにも高層ビルは林立しているが、それよりもサバンナの風景を見せたほうが手っ取り早い。

つまり、「無常」等の語が中世という時代を正しく言い当てている必要はなく、現代に生きる我々の「中世とはかくあるべし」という願望が投影されていることが重要なのである。<sup>(5)</sup>我々は、過去を振り返るときに時代の「特徴」をわかりやすくイメージすることで、長い歴史を把握しやすくしたいという欲求から逃れることは難しい。それぞれの時代に特定のイメージを<sup>(注)</sup>幻視することはきわめて自然である。批評の世界では、小林秀雄『無常といふ事』(一九四六年)や唐木順三『無常』(一九六五年)が、やはり中世を中心として「無常」を論じた。田中貴子『中世幻妖——近代人が憧れた時代』(二〇一〇年)が、テンケイテキな中世イメージ形成の背景に、研究者だけでなく近代知識人の影響を指摘するが、「無常」についても同様のことがいえるだろう。さらに、教育の場においてもこうした傾向を見いだすことができる。教科書が、学習目



標として「中世の無常観を読み取る」といった類いの目標を掲げており、「中世は無常の時代」という認識を前提とした教育が、そのイメージを再生産し、次世代に継承されてゆくのだ。

時代に「本質」などというものはなく、どの部分に注目するかによっていかようにも判断できる。それがあたかも定説のようになってしまふのは、偶然の積み重ねによつてそれが注目されただけにすぎない。無限にある後世の評価のなかの、ごく一部でしかないということを改めて認識したうえで、それを浮上させた「偶然」が、積み重なってゆく経緯や背景を検証することこそ重要ではないだろうか。

(藤巻和宏「中世が無常の時代というのは本当か」による)

(注) 縷説——詳しく説明すること

問一 傍線部 (A)「嘆息」、(B)「無批判」の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は  ・  。

(A) 嘆息

- ① 疲れ果ててため息をつくこと。
- ② 残念に思い、非常に嘆くこと。
- ③ 感心してため息をもらすこと。
- ④ 深く絶望して胸をつまらせること。
- ⑤ 緊迫した事態に激しく動揺すること。

(B) 無批判

- ① ものごとの善し悪しを吟味しないこと。
- ② 悪く評価されるのを受け入れないこと。
- ③ 善し悪しの評価を超越していること。
- ④ 批判を受けるところがなく素晴らしいこと。
- ⑤ 多くの人々に広く受け入れられていること。

問二 傍線部 (1)「ある文学作品をもってある時代の代表とする考え方」は何に由来すると考えられるのか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は  。

- ① その作品が、国語の教科書や、文学史について書かれた本に必ず載っていること。
- ② その作品の注釈書や現代語訳した本が、現在までに多数刊行されていること。
- ③ その作品が成立した当時から現代に至るまで、途絶えることなく読み継がれてきたこと。
- ④ 近代以降、時代ごとに名家の傑作を挙げる西洋の方式に倣って日本文学史が創られたこと。
- ⑤ その作品が成立した当時から現代に至るまで、変わることのない普遍的な価値が認められること。

問三 傍線部(2)「データベース『Japan Knowledge』で『新編日本古典文学全集』収録作品から「無常」という語を検索してみた」とあるが、その結果から読みとれることとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 時代が下がるにつれて「無常」という語句の用例が増えているということ。
- ② 新編日本古典文学全集に収録されている作品数が各時代とも同数というわけではないこと。
- ③ 「無常」の語義や文脈は、時代が下がるにつれて変化していったということ。
- ④ 「無常」の語義は時代や文脈によって異なる場合があり、数を比べても無意味だということ。
- ⑤ 「無常」という語句が中世に限らず、上代から近世まで用例が見られるということ。

問四 傍線部(3)「なぜこの「無常」が、中世の本質であるかのような誤解が定着してしまったのか」とあるが、その理由の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 「無常」だけが中世の本質だとするのは一面的にすぎるのだが、「無常」の浸透が中世の特徴であること自体は事実だから。
- ② 多くの日本文学史の中で、平安・鎌倉いずれの時代も「無常」という言葉によって時代の特徴の一面が説明されてきたことが、後続の文学史についての記述に強い影響を与えたから。
- ③ 「無常」という言葉や考え方を含めて六世紀に日本に伝来した仏教が、八世紀の『古事記』『日本書紀』に始まり、中世に至っても日本文学に強い影響を与えてきたのは事実だから。
- ④ 時代区分を導入した文学史が次々と書かれる中で、それぞれの時代に、他の時代とは異なるそれぞれの特徴を積極的に見出だそうとする傾向が顕著になったから。
- ⑤ 時代区分を導入した文学史で他時代の文学との差別化が必要とされる中、結果的に「仏教」「武士」「隠者」などが中世を他の時代と区別する指標となっていたから。

問五 傍線部(4)「時代を区分したことにより、時代の特徴なるものが過剰に意識されるようになったのである」とあるが、その結果生じることとして**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 28。

- ① 無常観は中世だけでなく古代にも見出だされ、さらに近世・近代に受け継がれており、「無常」という語句や考え方は時代を問わず多くの文献や事象に見出だせる。
- ② 六世紀に日本に伝来した仏教が日本文学に最初から影響を及ぼしているのは当然だが、八世紀の『古事記』『日本書紀』はその神話が主に注目され、仏教と関わるという印象は薄くなる。
- ③ かつては中古文学においても仏教からの影響は当然の前提だったが、王朝物語に見られる貴族たちのきらびやかな宮廷世界という側面が最も注目されるようになる。
- ④ 「仏教」「武士」「隠者」などは中世だけに限定されるものではないが、他の時代にはよりふさわしい特徴的な要素があるので、あえてこれらを他時代のイメージに据える必要がなくなる。
- ⑤ 「無常」等の語が中世という時代を正しく言い当てているわけではなくとも、人々の「中世とはかくあるべし」というイメージに合致していれば中世の特徴として定着する。

問六 傍線部(5)「我々は、過去を振り返るときに時代の「特徴」をわかりやすくイメージすることで、長い歴史を把握しやすくしたいという欲求から逃れることは難しい」とあるが、そのことよって起こることの説明として**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 29。

- ① それぞれの時代に特定のイメージを「幻視」するという特殊な見方が、極めて自然なことだと受け止められてしまう。
- ② 中世を中心として「無常」を論じた文学研究者の影響で、「無常」が中世の本質であるかのような誤解が定着してしまふ。
- ③ 中世は「無常」の時代だとする認識を前提とした教育によって、そのイメージが再生産され、次世代へと継承されていく。
- ④ 時代に本質などというものはなく、その時代の文学の特徴も、どの部分にどう注目するかによっていかようにも判断される。
- ⑤ 無限にある後世の評価の中のごく一部にすぎないものが、偶然の積み重ねによって時代の本質として注目され、定着していく。

〔二〕 古文 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

季繩(注)の少将すしょう、病やまひにいたうわづらひて、すこしおこたりて内裏うちにまゐりたりけり。(注)近江守公忠の君きみ、掃部助(注)にて蔵人(注)なりけるころなりけり。その掃部助にあひていひけるやう、「みだり心地こころちはまだおこたりはてねど、いとむつかしう心もとなくはべればなむまゐりつる。のちは知らねど、かくまで待まちること。まかりいでて、あさてばかりまゐり来こむ。よきに奏そうしたまへ」などいひおきてまかぬ。三日ばかりありて、少将のもとより文ふみをなむおこせたりけるを見れば、

(B) くやしうぞのちにあはむと契ちぎりける 今日けふをかぎりといはましものを

とのみ書きたり。いとあさましくて、涙をこぼして使つかひに問ふ。「いかがものしたまふ」と問へば、使も、「いと弱くなりたまひにたり」といひて泣くを聞くに、さらにえ聞えず。「みづからただいままゐりて」といひて、里に車とりによりて待つほど、いと心(注)もとなし。近衛の御門(注)にいでたちて、待ちつけて乗りてはせゆく。五条ごじょうにぞ少将の家あるにいきつきて見れば、いとみじうさわざのしりて、門かどさしつ。死ぬるなりけり。(注)消息せうそくいひ入るれど、なにのかひなし。いみじう悲しくて、泣く泣くかへりにけり。かくてありけることを、上かみの件奏くだりしければ、帝みかどもかぎりなくあはれがりたまひける。

〔大和物語〕による

(注) 季繩の少将——藤原季繩(？～九一九)。

近江守公忠の君——源公忠(八八九～九四八)。

掃部助——宮繕・清掃などの仕事をつかさどる役所の次官。

蔵人——もと皇室の文書などを納める蔵の管理官。のち天皇の側近として諸事務に当たる役人。

近衛の御門——大内裏東側、北から二番目の門。陽明門。

問一 傍線部①～③の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は  ～ 。

① おこたりて

- ① 休みをとって
- ② とぎれて
- ③ 手を抜いて
- ④ なまけて
- ⑤ よくなつて

② 心もとなし

- ① まちどおしい
- ② もの足りない
- ③ 不十分だ
- ④ はつきりしない
- ⑤ 不安だ

③ ののしりて

- ① 噂うわさにして
- ② 威勢いきせいがよくて
- ③ 口やかましくして
- ④ 大声を出して
- ⑤ あしざまに言って

問二 傍線部(A)「かくまで待ること」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 33。

- ① 病名を隠していままで暮らしてきました
- ② いままでこのように生きています
- ③ 駆けることができるようになりました
- ④ 完全に仕事に復帰できるまでになりました
- ⑤ いまのところは元気になりそうです

問三 (B)「くやくしくぞのちにあはむと契りける 今日をかぎりといはましもを」の歌の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 34。

- ① 悔しいことに将来また会いましょうと契りを結んだことです。今日で二度と会うつもりはないと言っておけばよかった。
- ② 無念なことにいずれまたお会いしようとして取り決めたことです。今日がもう限界だと言えばよかったのに。
- ③ 残念なことに後日お目に掛りましょうと約束したことです。今日が最後と申しあげればよかったのに。
- ④ 後悔されることに今後会わないことを誓ったことです。今日から先は会おうにも会えないと申しあげればよかった。
- ⑤ しまったことにのちの逢瀬おうせを契ったことです。今日一目しか会えないと口にしておけばよかった。

問四 傍線部(C)「消息いひ入るれど、なにのかひなし」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 35。

- ① 訪問したい由を言い入れたが、相手にしてもらえない。
- ② 案内を頼みこんだが、その余裕はないと言われた。
- ③ 生死を家の中に尋ねたが、無視された。
- ④ 手紙を書き入れたが、返事の手紙はすぐには出て来ない。
- ⑤ 見舞いを申し込んだが、無駄だと言われた。

問五 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は 

36
----

 ・ 

37
----

 。

- ① 公忠の君は、季繩の少将から手紙をもらい心配になって少将の家に駆けつけたが、死んだあとだった。
- ② 季繩の少将は、病気があまり治らないまま仕事に復帰しようとして掃部助に天皇への嘆願を依頼した。
- ③ 宮中で公忠の君が季繩の少将の使者から手紙を受け取ったときにはすでに少将は亡くなった後だった。
- ④ 季繩の少将の家に公忠の君が牛車で駆けつけようとしたときには見舞客は全く受け付けていなかった。
- ⑤ 死にいたるまでの季繩の少将の様子をお聞きになった天皇はそのことをひどくかわいそうに思われた。
- ⑥ 公忠の君は、季繩の少将を心配して少将からの使者に手紙を託したが、手紙は読んでもらえなかった。